人間文化創成科学論叢　第13巻　2010年

両親の過度の期待と青年の抑うつ傾向

――日本と中国における比較研究――

孫　　逸　舒*

Parents' Excessive Expectation and Adolescent Depression:

A Cross-Cultural Study among Japanese and Chinese Adolescents

SUN Yishu

abstract

Although the negative impact of parents' excessive expectation on their children's psychological well-being has long been pointed out, the quantitative research has rarely been done. This present study investigated the process of how parents' excessive expectation related to adolescents' depressive symptoms. The parenting practices that hurt adolescent feelings (e.g. "said that I humiliated him/her") were put into the model as a mediator, and the effects of adolescent's gender, parents' warmth, and perceived family wealth were controlled. Japanese (N=525) and Chinese (N=364) university students completed a questionnaire. The results of simultaneous multigroup analysis showed that the models of Chinese and Japanese adolescents were the same and that the hypotheses were supported. Both mothers' and fathers' excessive expectations for adolescents were related to more harmful parenting practices, then such practices of parents' related to greater depressive symptoms of their adolescent children. Similarities and differences related to gender, parents' warmth, and perceived family wealth between Japanese and Chinese participants were discussed.

Keywords：expectation; adolescent; depression; Chinese; parenting

問　題

日本と中国は古来、儒学の影響と集団主義的な社会文化的背景のために、子どもの社会的成功は親ないし一族の評判に直結されやすく、そのため、養育者による子どもへの期待が高くなりがちであると言われている（Chao & Tseng, 2002）。実際、アメリカで行われた小学生から大学生を対象とした多くの実証的研究で、東アジア系の子どもはヨーローッパ系の子どもに比べ、学業面における親からの期待が高いことが報告されている（e.g. Hao & Bonsted-Bruns, 1998; Oishi & Sullivan, 2005; Steinberg, Dornbusch & Brown, 1992）。さらにここ数十年間、日本と中国では、少子社会の到来、グローバル化に伴う競争の激化、雇用の不安定化、そして格差の広がりに伴う危機感の増大が、子どもへの学業面を中心とする親の期待に拍車をかけていると言われている（柏木, 2002; 岡田, 2005; 許, 1999; 山田, 2004; 依田, 1997; 鄭, 2000）。

親の期待は子どもの一般的な競争心、人格、社会的規範、進路の目標、性役割観など広範囲な側面に影響する

キーワード：期待; 青年; 抑うつ; 中国; 養育

＊平成22年度生　人間発達科学専攻

と様々な実証的研究において示唆されてきた（上山，2007; 遠山，2006; 伊藤，1980）。しかし親の期待が過度になると、子どもの心理的健康にネガティブな影響を及ぼすということが古くから指摘されているにもかかわらず（e.g., 小林，1969; 新堀，1969; 依田，1997）、関連する実証的研究は少なく、結果も一貫していない。

比較的早期の研究では、養育態度の一因子として広範な「期待」が付帯的に調査され、親の期待と子の心理的健康は必ずしも負に関連しない結果が得られている。例えば冷川・蘭・原田（1981）の研究では、両親の期待から子どもの自尊感情へ正の影響が見出されている。また、FrostとMarten（1990）の研究では、「親の期待・親の批判」尺度の得点は、大学生の抑うつを始めとする9つの症候群のいずれとも無相関で、症候の深刻さとのみ正の相関があった。

しかし、親の期待と期待の程度に焦点をあてた研究では、一貫して高い期待によるネガティブな効果が見出されている。大芦・岡崎・山崎（1996）は、有名大学を志向する両親の価値観が、学業面での過保護・過干渉な養育態度に媒介され、結果として、虚血性心疾患の危険因子として知られているタイプA行動パターンの発達を子どもにおいて促進すると報告している。両親からの期待を高いと認知するほど、高校生の完全主義傾向が高く（河村，2003）、両親による就職・学業期待は、青年の自覚している期待達成度や親子関係にかかわらず、青年の負担感と正に関連することが報告されている（富沢，2005）。また、OishiとSullivan（2005）の研究では、日米の大学生が知覚する親の期待への達成度の低さは、自尊感情及び人生満足度の低さを予測し、東アジア人が欧米人よりも抑うつ傾向が高いという文化差と同時に、個人間の差をも説明するという結果を報告している。Essauら（2008）がドイツと中国で行った研究では、身近な重要な他者による非現実的な高い期待は、両国の青年の不安症候と正に相関し、侯（2002）の中国での研究では、親の子どもの将来に対する「期待・干渉」は、子どもの抑うつ性と劣等感に正に相関した。

いくつかの比較文化的研究において、取り上げた期待の程度は異なるが、期待と心理的健康の関係は国によっても異なることが示唆されている。まず、従属変数としてストレス、抑うつ、学業不安、攻撃性、身体の不調をとり上げ、日・米・中国（台湾）の高校生の心理的不適応と両親の期待や満足について行った研究（Crystal, Chen, Fuligni, Stevenson, Hsu, Ko, Kitamura, & Kimura, 1994）で、学業面において日本の高校生は最も低い両親の満足度を、中国の高校生は最も高い親の期待を報告した。しかし日本の生徒の不適応の程度は3群中で最も低く、中国の生徒は抑うつ気分と身体的症状の頻度に関してのみ、アメリカの生徒を上回った。もう一つの高校生を対象とした研究（Chen & Stevenson; 1995）では、親の期待を満たすと思われる数学の試験の点数から自分が実際に取ると予想される点数を引いた差は、コーカサス系アメリカ人、東アジア系アメリカ人、中国人、そして日本人の順に大きくなっている。しかし予想とは逆に、アメリカの生徒の2群はより高いストレスと攻撃的な気分を報告し、抑うつ気分を感じる頻度と身体的症状は、日本の高校生が最も少なかった。

以上のように、親の期待と子どもの心理的健康との関連は、期待の程度と文化によって異なる可能性が示唆されている。そこで本研究では、両親の期待の中でも「子どもの個性を無視した、それを満たすことが非常に難しい期待」という過度なものに限定し、また、過度の期待の効果のより詳しい文化差を探るため、同じ東アジアにありながら高校生を対象としCrystalら（1994）の研究で異なった結果を示した日本と中国で質問紙調査を行う。調査対象を、大学受験を経験した青年たちとし、先行研究で多く用いられてきた抑うつ傾向を従属変数とする。

さらに、両親の期待が子どもの精神的健康にいかに関連するか、そのプロセスに関する実証研究がまだ見当たらないため、本研究は、DarlingとSteinberg（1993）が多くの先行研究を踏まえて打ち立てた「養育スタイルの文脈的モデル」の一部、すなわち両親の目標と価値観が養育実践に媒介されて、青年の適応に影響するというプロセスモデルを参照し、養育実践を媒介として取り入れた仮説モデルに沿って検討を行う。具体的には、両親の過度の期待は、期待が応えられてない時に両親の行動として生じやすいと考えられる、子どもを心理的に傷つける行為（Chao & Tseng, 2002; 柏木，2002）に媒介され、最終的に子の抑うつ傾向に関連するというプロセスについて調べたい。同時に、少子社会に至った過程は異なってはいるが現時点でともに少子社会である日本と中国では、子どもを大事に育てる伝統があるため（e.g., Chao & Tseng, 2002）、暖かい、受容的な養育も広く見られることが予想される。受容的な養育態度と子どもの心理的健康の正の関連性は先行研究において一貫して示されている一方（ e.g., 冷川・蘭・原田，1981; Ge, Best, Conger, Simons, 1996; Dekovic & Meeus, 1997）、両親の情緒的支持が高いほど、子どもへのさまざまな面における期待も高くなることも示唆されており（簗田，

2000)、そのため過度の期待と受容的な養育態度の並存が無視できないと考えられる。そこで本研究では、受容的な養育態度を統制変数として取り上げる。

以上まとめると、本研究の仮説は主に二つある：①日本と中国で、両親の過度の期待は、子どもを心理的に傷つけるような行為（以下、心理的傷つけ行為または傷つけ行為と略す）に媒介されて、青年の抑うつ傾向と正に相関する　②上記のプロセスにおいて、日中の青年には共通点とともに独自の特徴が見られる。

方　法

調査時期と参加者

調査は日本と中国で2006年９月から10月に実施され、参加者は中国東北部の某大学の二年生、そして東京都内の某私立大学の二年生及び一年後期の学生である。

測定尺度

過度の期待　両親が青年にどれぐらい過度の期待をかけてきたかを測定するため、これまでの議論や研究によって、過度の期待と関連深いと指摘された態度を参照し、４つの質問項目からなる「過度の期待尺度」を作成した。項目は、子どもの理想化すなわち全体的に子どもに完璧を求めること（柏木, 2002; 森田, 2000; 岡田, 2005)、そして一方的になりがちな、子どもに自分の夢を託すこと（柏木, 2002; 小林, 1969; 侯, 2002; 森田, 2000)、また、しばしば問題視されてきた学業面での過度の期待（千葉, 1987; 須田, 1976; 依田, 1997)、最後に自己愛を満たす道具として子どもに期待をかけている場合（新堀, 1969; 岡田, 2005）に持ちやすいと考えられる、人前での子どもを気にする傾向を反映する項目である（項目はTable１を参照)。回答者は両親それぞれについて、各項目がどれぐらいあてはまるか、５段階で評価した（まったくそうでない＝１～たしかにそうだ＝５)。

心理的傷つけ行為　両親からの心理的傷つけ行為を測定するため、親の養育様式尺度（辻井・中島, 1995）の中の、「操作･侵入的な父親像・母親像」因子を参照しながら、身体的暴力、言語的暴力について項目を増やし、20項目の尺度を作成した。参加者は両親それぞれについて４段階（まったくなかった＝１～しょっちゅうあった＝４）で評価した（項目はTable２を参照)。

抑うつ傾向　抑うつ傾向を測定する尺度は、20項目のうつ病自己評価尺度（CES－D:Radloff, 1977; 島, 1985）を使用した。最近一週間の抑うつの程度を４段階（１日未満＝１，１～２日＝２，３～４日＝３，５日以上＝４）で評価するもので、抑うつ傾向が強いほど、得点が高い。

受容的な養育　養育態度尺度（鈴木・松田・永田・上村, 1985）の下位尺度である「受容的・子ども中心的かかわり尺度」を使用した。回答者の負担を軽減するため､「受容的かかわり」を測定する７項目を採用し、主に「子ども中心的かかわり」を測定する３項目は取り除いた。また、人称を「私は」から「私の母親／父親は」に変え、「子ども」を「私」に変えた。項目は具体的に：「私の悩みや心配ごとを理解している」、「私と一緒に、外出や旅行をするのが好きだ」、「私にたびたび話しかける」、「私がこわがっている時には安心させてくれる」、「家で私と楽しい時間を過ごしてくれる」､「自分のことは我慢しても、私のためにしてくれることがよくある」､「自分にとって、私がなによりも大切だと思っている」である。養育が受容的であるほど得点が高い。

Table１　過度の期待尺度の主成分分析（数字は第１主成分への負荷量）

項目	中国父 n＝357	中国母 n＝359	日本父 n＝483	日本母 n＝504
・ほとんどの同級生が取れない高い成績を要求する	.81	.82	.84	.84
・私が何でも完璧にこなさないと気に入らない	.79	.81	.86	.86
・自分の夢を私に託している	.60	.60	.72	.73
・私の礼儀作法や人前での振舞いのために怒ることがある	.60	.58	.50	.50
説明率	49.83	50.43	55.17	55.85
４項目の信頼性係数α	.65	.65	.70	.72

最後に、家庭の経済的状況について５段階（大変悪かった＝１～大変よかった＝５）で尋ねた。日中両国で、両親の過度の期待、傷つけ行為、家庭の経済的状況は、参加者が大学に入るまでの状況について尋ねた。

実施手続き

質問紙は無記名で行い，口頭で任意回答であることを説明した。中国での調査は二年生各クラスの担任教員がクラスで実施し、その場で回収した。日本での調査は、一、二年生向けのある授業で実施・回収し、一、二年生の回答と特定できるもののみを分析対象とした。

結　果

中国の大学生364名（男子75名、女子285名、不明４名）、日本の大学生525名（男子228名、女子297名）から回答を得た。中国の回答者の平均年齢は20.80（*SD*＝1.15）歳で、２年生が297名、一年生が３名、その他・不明が64名である。日本の回答者の平均年齢は20.05（*SD*＝1.53）歳で、２年生が76名、一年生が447名、その他・不明が２名である。

尺度の検討

抑うつ感情尺度（CES－D:Radloff, 1977; 島, 1985)、受容的養育尺度（鈴木他, 1985改）については、中国・日本どちらのサンプルにおいても信頼性が確かめられた（CES－DのCronbach のα係数は中国が.86、日本が.86で、受容的養育尺度のα係数は中国は.81（父)、.81（母)、日本が.86（父)、.83（母）であった)。これらの尺度については、項目の合計得点を尺度得点とした。また、受容的養育得点は父親と母親で別々に算出された。

今回新たに作成した「過度の期待尺度」及び「傷つけ行為尺度」の一次元性を検討するため、主成分分析を行った。過度の期待尺度について、４項目のα係数は、中国のサンプルにおいて両親とも.65で、日本では父親が.70、母親が.72であり、信頼性が認められた（Table１)。そこで、国・両親別に、４項目の合計得点を算出して尺度

Table２　傷つけ行為尺度の主成分分析（数字は第１主成分への負荷量）

項目	中国父 n＝345	中国母 n＝347	日本父 n＝456	日本母 n＝478
・私が傷つくことを平気で言って、何とも思わなかった	.77	.75	.67	.71
・私のせいで恥をかいたと言ったことがある	.73	.68	.70	.68
・私に失望したという気持ちをあらわしたことがある	.72	.73	.76	.77
・自分の話したいことだけ話して、私の話は聞かなかった	.71	.70	.67	.67
・私の意志を確かめないで、勝手に物事をすすめた	.70	.67	.65	.66
・私に大声を出して怒ったことがある	.68	.68	.59	.57
・私に「ばか」といった侮蔑的な言葉を使った	.67	.64	.66	.70
・私が思った通りにしないと、気に入らなかった	.64	.61	.56	.60
・「どうしてこれくらいのことができないの」または同じ意味のことを言った	.62	.62	.73	.66
・私の友人づきあいにとやかく言った	.62	.68	.60	.64
・私がいくら一生懸命にやったことでも評価しなかった	.60	.62	.72	.68
・私を生んだことを後悔していると言ったことがある	.59	.58	66	.64
・私に手を上げたことがある	.56	.58	.67	.68
・私に「子どものくせに」と言ったことがある	.55	.61	.65	.64
・無断で、私の部屋に入ったり、持ち物に触ったりした	.54	.54	.50	.42
・同年代の具体的なだれかに見習うように言った	.45	.52	.65	.56
・私が自分からやろうとする前に、先に手回しした	.44	.44	.55	.61
説明率	39.63	39.71	42.23	41.47
17項目の信頼性係数α	.90	.90	.91	.91

得点とした。傷つけ行為尺度について、20項目のうち、国と父親、母親で別々に行った４つの分析のいずれかで第１主成分への負荷量が.35未満のものを削除し、最終的に削除されなかった17項目の合計点を尺度得点とした。17項目のα係数は、中国サンプルでは父親も母親も.90で、日本サンプルでは父親も母親も.91となり、信頼性が確かめられた（Table 2）。

平均値の比較

まず、中国（n＝364）と日本（n＝508）の参加者が報告した家庭の経済状況と抑うつ傾向を比較するため、t 検定を行った。その結果、大学に入るまでの家庭の経済状況に関して、中国の大学生は日本の大学生よりもネガティブに評価した（$t(842)=3.05, p<.01$）。しかし抑うつ傾向では日本の大学生の方がより高い得点を示した（$t(842)=5.48, p<.001$）。

次に、養育に関する変数（過度の期待、傷つけ行為、受容）を国・両親別の4群で一元配置の分散分析を行ったところ、それらの変数のＦ値が全て有意であった（Table 3）。そこで、群間差を知るためTukeyの多重比較（Table 3）を行った。その結果、過度の期待は、同じ国の両親間では差がなく、中国の両親は日本の両親よりも有意に高い得点を示した。また、中国の両親の間で傷つけ行為の有意差はなく、日本の母親の傷つけ行為は４グループの中で最も高く、日本の父親は最も低かった。受容的な養育は、中国の母親が最も高い得点、日本の父親が最も低い得点を示した。

Table 3　国・親別の知覚された養育の比較（一元配置分散分析及びその後の多重比較の結果）

		中国の父親	中国の母親	日本の父親	日本の母親	F値
過度の期待	*M(S.D)*	11.26(－3.81)a	11.48(－3.91)a	9.30(－3.63)e	9.77(－3.71)e	34.38^{***}
	n	357	359	483	504	
傷つけ行為	*M(S.D)*	29.15(－9.02)c	30.51(－9.31)b	28.31(－9.73)d	32.64(－10.54)a	17.18^{***}
	n	345	347	456	478	
受容的養育	*M(S.D)*	27.43(－5.81)c	29.54(－5.37)a	24.22(－6.32)e	27.2 7 (－5.36)c	61.57^{***}
	n	355	362	474	494	

Tukeyの多重比較　a－b*, a－c***, a－d***, a－e***, b－d**, c－e***
注）$^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$

諸変数の相関

尺度の相関を国別に算出したところ、日中両国のサンプルで，養育に関する尺度（期待・傷つけ行為・受容）の得点は両親同士で高い相関がみられ（いずれの変数に関しても$r>.60$, $p<.001$）、両親の受容は過度の期待と弱い相関が見られ（$r=-.13$ ～.12, $p<.05$または*n.s.*）、傷つけ行為と抑うつ傾向は負の相関を示した（$r=.26$ ～.37, $p<.001$）。しかし、抑うつ傾向は日本の青年では両親の過度の期待・傷つけ行為と負の、両親の受容と正の有意な相関を示したのに対し（Table 4）、中国の青年では両親の傷つけ行為・家庭の経済的状況とのみ0.1％水準で有意に相関し、父親の過度の期待尺度との相関は有意傾向にとどまった（Table 5）。性別は中国のみ、両親の過度の期待と有意な関連を示した（男＝1、女＝2、両親いずれに関しても$r=-.19$, $p<.001$）。年齢は他の変数と相関が弱かったため、以後の分析に含めなかった。

構造方程式モデリングによる仮説の検討

過度の期待が傷つけ行為を介して、青年の抑うつ傾向と正に関連するという仮説を調べるため、構造方程式モデリングを行った。まず、国によるモデルの違いを知るため、多母集団同時分析を行った。分析にはAmos（ver.5.0）を使用し、全ての独立変数と従属変数について、家庭の経済的状況、回答者の性別、そして両親の受容的な養育を統制した。モデル選択基準（AIC、BCC）は、制約を課さないモデルよりも、仮説のプロセス、つまり親の過度の期待と媒介変数である親の傷つけ行為の間、そして傷つけ行為と抑うつ傾向のパス係数に等値制約を置く（統制変数に関しては制約を課さない）モデルのほうが低かった（Table 6）。以上より、パス係数が等しいと仮定するモデルにおいてデータの当てはまりが最もよりと判断した。モデル適合度は、$\chi^2=19.142$（*df*

Table 4　日本の諸変数間の相関（n＝508）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 過度期待（父）									
2 過度期待（母）	.68***								
3 傷つけ行為（父）	.49***	.31***							
4 傷つけ行為（母）	.26***	.48***	.61***						
5 受容（父）	.12*		-.18***	-.21***					
6 受容（母）			-.19***	-.28***	.61***				
7 抑うつ傾向	.19***	.16***	.37***	.33***	-.21***	-.23***			
8 年齢									
9 性別（男＝1、女＝2）			-.21***	-.09*	.24***	.36***	-.11*		
10家庭の経済状況			-.15**	-.18***	.19***	.20***	-.19***		.14**

注）有意な相関係数のみを示した。†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

Table 5　中国の諸変数間の相関（n＝362）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1 過度期待（父）									
2 過度期待（母）	.74***								
3 傷つけ行為（父）	.48***	.35***							
4 傷つけ行為（母）	.34***	.47***	.70***						
5 受容（父）	-.10†		-.30***	-.24***					
6 受容（母）	-.13*	-.12*	-.31***	-.43***	.61***				
7 抑うつ傾向	.09†	.14*	.33***	.26***	-.15**	-.14**			
8 年齢							-.13*		
9 性別（男＝1、女＝2）	-.19***	-.19***	-.14*		.11*	.13*			
10家庭の経済状況						.11*	-.19***	.09†	.13*

注）有意な相関係数のみを示した。†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

＝12, p＝.085), GFI＝.994, AGFI＝.956, RMSEA＝.029であり、十分な値が得られた。日中のモデルは同様となり、両親の過度の期待は両親それぞれによる子どもへの心理的傷つけ行為を予測し、父親による心理的傷つけ行為は0.1％水準で青年の抑うつ傾向を予測し、母親による心理的傷つけ行為は5％水準で青年の抑うつ傾向を予測した（Figure 1）。

Table 6　日本と中国のモデル比較結果

等値制約の種類	AIC	BCC
制約なし	176.498	181.243
パス係数	175.142	179.655

考　　察

本研究は、日本と中国の青年において、両親の過度の期待は心理的傷つけ行為に媒介されて、子どもの抑うつ傾向と正に関連するという仮説1、そして日中両国ではこのプロセスに相違点があるという仮説2について調べた。多母集団共分散構造分析の結果、両国の大学生サンプルにおいて仮説1のみが支持された。遡及的ではあるが、本研究の結果は、両親の過度の期待は両親による子どもを心理的に傷つけるような具体的な養育行動につながり、そして大学に上がるまでの両親の傷つけ行為の認知は青年の現在の抑うつ傾向と関連することを見出し

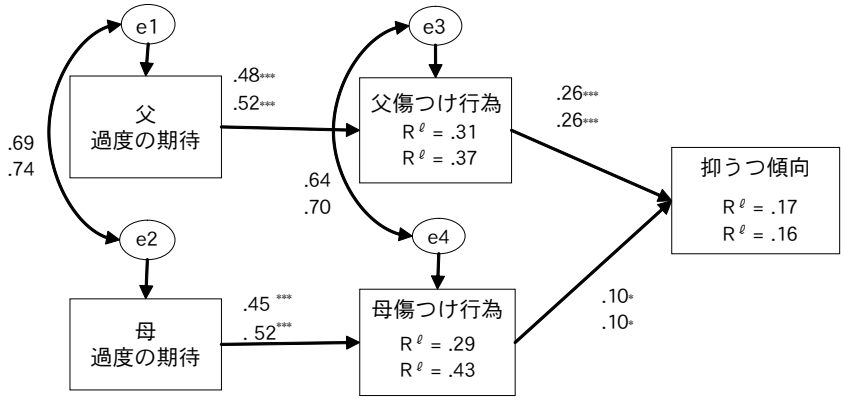

Figure 1　日中の両親の過度の期待と子の抑うつ傾向に関する多母集団パス解析

注）上段が日本（n＝401）の値、下段が中国（n＝322）の値。
統制変数（＝性別、家庭の経済的状況、両親の受容的な養育）は省略
* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

た。

日中両国のサンプルでともに、母親の傷つけ行為は父親よりも多く報告されたにもかかわらず、多母集団パス解析の結果、母親に比べて父親の傷つけ行為が子どもの抑うつ傾向をより強く予測することが示唆された。この傾向は先行研究と一致している。中川と佐藤（2005）の研究において、父親の過干渉のみが子どもの抑鬱と正に関連し、また、Shek（1999）が香港で行った縦断的研究も、父親は母親よりも青年の心理的健康へ重大な影響を及ぼすことを示唆している。Shek（1999）は両親のこのような相違について、以下のように分析している。すなわち、父親は子どもとコミュニケーションをとる機会及び子どもとのかかわり全体が母親に比べて少なく、同時に、伝統的に「一家の主」として母親よりも大きい権威を持つ傾向があるため、父親の子どもに対する行為は子どもにとって影響力がよりつよい可能性がある。本研究で使用した受容的な養育の質問項目も、コミュニケーシュンの良さにも関連深いものが多く、両親の傷つけ行為と子どもの抑うつ傾向との関連の違いは、コミュニケーションの良さの違いによるという推測を支持するものとも考えられる。しかしコミュニケーションの効果を確かめるには、家庭内の力関係、謝罪・話し合いなど親子間のネガティブな行為に伴う文脈をも含めた、養育と子どもの心理的健康に関する今後の研究が必要であろう。

また、分散分析の結果、父親と母親の双方において、中国は日本よりも子どもへの過度の期待が高いという結果が得られた。このことは中国の各家庭内の子ども数は日本よりさらに少ないこと、近年の著しい経済発展のため進学･就職による上方への階層移動の見込みがより大きく知覚されていること、そして余剰労働人口が多い上、一般的に理想とされるホワイトカラーの就職先がまだ相対的に少ないため、進学・就職の際の競争が日本よりもさらに激しいことが原因として考えられる（許，1999; 山田，2004; 鄭，2000）。同時に、本研究で取り上げた養育に関する３つの変数（子どもへの過度の期待、心理的傷つけ行為、受容的な養育）のいずれにおいても、日本の父親の得点が最も低いという結果が得られたが、共働きが基本である中国に対し、日本では専業主婦が子育ての主な責任を引き受けるというジェンダーによる両親の役割分担の違いが原因であると考えられる。両親の養育態度・養育行為に対する両親の就業形態の影響を確かめるためには、より多くの国でさらなる調査を行う必要があろう。

本研究の限界として、主に、クロスカルチャー研究としてサンプルサイズが十分ではなく、学校も両国にそれぞれ１校のみで、学校要因による影響を取り除くことができないこと、そして遡及的であるために因果関係が特定できないことが挙げられる。今後は家族の文脈を含んだ、より多様なサンプルでのさらに詳しい調査研究が必要であろう。

引用文献

Chao, R. & Tseng, V. (2002). Parenting of Asians. In Bornstein, M. H.(Ed.), Handbook of parenting. 2nd ed. Vol. 4. Social conditions and applied parenting. New Jersey: Lawrence Erlbaum associates, publishers Mehwah. pp. 59-90

Chen, C. & Stevenson, H. W. (1995). Motivation and mathematics achievement: A comparative study of Asian-American, Caucasian-American, and East Asian high school students. *Child Development*, **66**, 1215-1234.

千葉康則 (1987). 子どもにとってのストレス. *児童心理*, 41(11), 1297-1306.

Crystal, S. D., Chen, C., Fuligni, J. A., Stevenson, W. H., Hsu, C.-C., Ko, H.-J., Kitamura, S., & Kimura, S. (1994). Psychological maladjustment and academic achievement: A crosscultural study of Japanese, Chinese, and American high school students. *Child Development*, **65**, 738-753.

Darling, N., & Steinberg, L. (1993). Parenting style as context: An integrative model. *Psychological Bulletin*, **113**(3), 487-496.

Dekovic. M., & Meeus. W. (1997). Peer relations in adolescence: effects of parenting and adolescents' self-concept. *Journal of Adolescence*, **20**, 163-176.

Essau, C. A., Leung, P. W. L., Conradt, J., Cheng, H. & Wong, T. (2008). Anxiety symptoms in Chinese and German adolescents: their relationship with early learning experiences, perfectionism, and Learning motivation. *Depression and anxiety*, **25**, 801-810.

Frost, R. O. & Marten, R. A. (1990). Perfectionism and evaluative threat. *Cognitive Therapy and Research*, **14**(6), 559-572.

Ge, X., Best, K.M., Conger, R.D., Simons, R.L. (1996). Parenting behaviors and the occurrence and co-occurrence of adolescent depressive symptoms and conduct problems. *Developmental Psychology*, **32**(4), 717-731.

冷川昭子・蘭千壽・原田純治 (1981). 環境適応に及ぼすSelf-Esteemと両親の養育行動の効果. *健康科学*, **3**, 133-140.

Hao, L., Bonstead-Bruns, M. (1998). Parent-child differences in educational expectations and the academic achievement of immigrant and native students. *Sociology of Education*, **71**, 175-198.

侯桂芳 (2002). 中国における一人っ子青年の性格特性と認知された親の養育態度. *性格心理学研究*, **10**(2), 85-97.

上山香織 (2007). 親からの期待と小学生の競争意欲との関連. *臨床教育心理学研究*, **33**(1), 90

柏木恵子 (2002). 臨床発達心理学概論－－発達支援の理論と実際　柏木恵子・藤永保 (監), 長崎勤・古澤頼雄・藤田継道 (編著) シリーズ/臨床発達心理学① ミネルヴァ書房出版 pp. 78-88.

河村照美. (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連. *九州大学心理学研究*, **4**, 101-110.

伊藤裕子. (1980). 女子青年の性役割観と父母の養育態度: 大学生の職経歴選択を中心に. *教育心理学研究*, **28**(1), 67-71.

小林さえ (1969). 過保護児のエゴイズム. *児童心理*, **23**(12), 102-107.

許敏 (1999). 中国における家庭環境の変容と両親の教育期待の形成――大連市での質問紙調査に基づいて. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, **39**, 185-194.

李文道・钮丽丽・邹泓 (2000). 中学生压力生活事件、人格特点对压力应对的影响. *心理发展与教育*, **4**, 8-13.

間庭充幸 (2005). 若者の犯罪　凶悪化は幻想か　世界思想社

簗田さや夏 (2000). 中学生の意欲と、親の養育態度及び期待との関連. *日本教育心理学会総会発表論文集*, **42**, 36.

森田明子 (2000). 心配性の親に育てられた子どもの性格. *児童心理*, 54(17), 1613-1618.

中川明仁・佐藤豪 (2005). 完全主義と認知された養育態度および精神的健康との関連. 同志社心理, **52**, 16-25.

新堀通也 (1969). 教育ママのエゴイズムと子ども. *児童心理*, **23**(12), 90-95.

Oishi, S., Sullivan, W. H. (2005). The mediating role of parental expectations in culture and well-being. *Journal of Personality*, **73**(5), 1267-1294.

岡田尊司 (2005). 誇大自己症候群. 筑摩書房

大芦治・岡崎奈美子・山崎久美子 (1996). タイプA行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向及び養育態度の影響. *発達心理学研究*, **7**(1), 41-51.

鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 (1985). 養育態度尺度. 堀洋道・山本真理子・松井豊 (編). (1994). *心理尺度ファイル――人間と社会を測る*. 垣内出版, 358-362.

Shek, D. T. L. (1999). Paternal and maternal influences on the psychological well-being of Chinese adolescents. *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, **125**(3), 269-296.

島悟 (1985). 新しい抑うつ性自己評価について. *精神医学*, **27**, 717-723.

Steinberg, L., Dornbusch, S. M., Brown, B. B. (1992). Ethnic differences in Adolescent achievement: An ecological perspective. *American Psychologist*, **47**(6), 723-729

須田秀幸 (1976). 「子どもへの期待」とはだれにとっての期待か――発想の観点について. *児童心理*, **30**(1), 30-37.

鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 (1985). 養育態度尺度. 堀洋道・山本真理子・松井豊 (編). (1994). *心理尺度ファイル――人間と*

社会を測る. 垣内出版, 358-362.

富沢麻美 (2005). 青年期における親の期待とその負担感に関する研究――大学生・専門学校生を対象に. *人間科学研究*, **18**(補遺号), 35.

遠山孝司 (2006). 小・中学生の親子関係,親からの期待,子どもの目標の関係：親子関係がよいと子どもは親の期待に応えようとするのか. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発立つ科学*, **53**, 37-55.

辻井正次・中島啓之 (1995). 非行少年の両親像とドルドラム――Winnicott, D.W.の情緒発達理論からの検討. *犯罪心理学研究*, **33**(1), 1-15.

山田昌弘 (2004). 希望格差社会――「負け組」の絶望感が日本を引き裂く　筑摩書房

依田明 (1997). 少子時代の子どもたち――のぞましい家庭教育を探る, ブレーン出版.

鄭楊 (2000). 験志向を持つ親子の家庭教育――小中学生を中心に. *関西教育学会紀要*, **24**, 236-240.